

「書塾」成果展示（国重要文化財小林家住宅）東京都西多摩郡檜原村
書道と和紙のプロジェクト in ひのはら
文化庁 令和7年度 生活文化創造・戦略展開事業

AKIGAWA ETHICAL CREATIVE REPORT 2025-2026

AKIGAWA ETHICAL CREATIVE REPORT 2025-2026



特集 THE ART OF RETURNING

還るという美学 書道と和紙のプロジェクト in ひのはら



目次

- 2 ステートメントはじめに
- 4 実施工程
- 5 筆と紙の交響 現代文人五人
- 8 現代文人とオオカミ
川邊りえこ・三角みつ紀・KiNG・高梨元秀
- 12 神人共食 丸講の直会 計算機自然 落合陽一
- 16 書道とサステナブルな日本文化の魅力を
次世代につなぐ エデュケーションプログラム
- 20 ポスト”Society 5.0”エシカル次代に向けた
書道を中心とする日本のくらしと伝統、
持続可能にアップデートされる文化の可能性
岡田智博
- 23 詩 三角みつ紀

書道と和紙のプロジェクト in ひのほら

文化庁 令和7年度
生活文化創造・戦略展開事業

主催：文化庁

企画・運営：株式会社シー・ディー・アイ

協力：一般社団法人クリエイティブクラスター

連携：つくる!あきがわアートストリーム2025

クリエイティブクラスター：川邊りえこ
キュレーター：岡田智博

はじめに

― 筆と紙の交響 ―

東京・檜原村で生まれし 書道・和紙・計算機自然の共創

デジタル、ネットワーク、グローバル化が進み、同時に持続可能な地球と文明への進化が求められるこれから、「日本らしさ」をつかさどる手を動かす文化が次の世代の生活から遠のきはじめています。

いわば、らしさとして誇ってきた「クールジャパン」のハードコアが遠のきつつあるのです。そこで、私たちは手で書くことがどんどん少なくなるDX時代における「書道」の次代へと続く、エシカルな可能性に着目しました。

山野に生える植物と清冽な水から生まれた和紙と墨は、世界都市「京都」「江戸・東京」の書による日本らしい高度な文明を支え、発展させる原動力となり、使われた紙はまた繊維として自然に循環するエコシステムからこれからの日本らしい暮らしの中での文化の姿を見出すことができます。

「江戸・東京」の循環する文化のエコシステムの起点のひとつであり、当時の和紙の産地の原料を用いた、紙漉きがいまよみがえる、TOKYOの源流、檜原村を舞台として、書道と和紙を軸に、現代における新たな表現と実践を令和7年（2025年）の秋、展開しました。

書道と和紙のプロジェクト in ひのはら プロジェクト工程

令和7年(2025年)

5月～10月 フィールドリサーチ
檜原村地元コンテンツ共創開発

10月～11月 アートプロジェクト
現代文人五人 作品制作

11月21日～12月15日
つくる！あきがわアートストリーム2025と連携した
檜原村内作品展示・アウトリーチの実施

12月7日 「現代文人」落合陽一によるナオライの実施

アウトリーチプロジェクトの実施

- ・檜原村の原料で和紙をつくろう
11月23日 講師：北村春香 アーツキャンプひのはら
- ・山の書塾 天空の国重要文化財で書こう！
11月30日 講師：川邊りえこ 国重要文化財小林家住宅
- ・野草を筆にワークショップ「ハジケま書」
12月7日 講師：山田麻子 檜原書道教室

令和8年(2026年)

成果展示の実施

1月16日～18日 東京 DAIKANYAMA T-SITE GARDEN GALLERY
2月13日～15日 京都 梅小路公園西側 緑の館

実施アーカイブの出版と映像化

プロジェクト記録WEBサイト <https://shodobunka2025.creativecluster.jp/>

アーカイブ映像制作：仲本拓史

筆と紙の交響
現代文人五人

はじめに

東京の源流、深い山々と清流に抱かれた檜原村。
江戸時代より豊かな水と森林に恵まれ、楮を育て、紙を漉き、
自然の恵みを文化へと昇華してきた里です。

和紙はこの地に生きた人々の「いのちの記憶」であり、
大地と人々が共に生み出した日本の宝といえるでしょう。

そしてこの山々には、古より「オオカミ」の伝承が息づいています。
狼は山の神の使いとして人々に崇められ、畏れと祈りの象徴であり、
自然と人との境を見守る精霊として敬われてきました。

本プロジェクトでは、その檜原の精神を象徴する存在として
「オオカミ」の塑像を、村の和紙によって形づくりました。
そこに、現代の文人たちがそれぞれの筆によって魂を宿します。

乙巳 霜月吉日

川邊りえこ

文人の系譜と精神

「文人」とは、筆をもつて心表し、詩・書・画を通じて精神の風景を描く人。

その起源は古代中国の士大夫文化にあり、詩書画三絶を修めた知識人たちは、

芸術を政治や権威から切り離し、人格の表現として昇華しました。

この思想はやがて日本に渡り、平安貴族の書、鎌倉の禅僧の墨蹟、

そして江戸の文人画へと受け継がれます。

池大雅、与謝蕪村、浦上玉堂らは官に仕えず、

自然と心を同化させた自由なる美の精神を生きました。

彼らにとつて芸術とは、形式ではなく「生き方そのもの」であり、

風・間・静寂の中に心の真を描こうとしたのです。

現代文人の気韻

現代に生きる五人たちもまた、

その精神を継ぎながら、それぞれの筆によつて時代の心を刻みます。

書は、言葉を超えた呼吸であり、

人の生命と紙の気配が溶けあう瞬間に生まれます。

和紙は単なる素材ではなく、自然の霊が宿る依り代（よりしろ）となるのです。

檜原の山の気、和紙の静寂、そして文人の筆を媒介として、

オオカミは再び目をひらき、現代の神話が立ち上がります。

「筆と紙の交響——現代文人五人」は、

和紙・書・精神が響きあう総合芸術であり、自然と人との共振を通して、

檜原村の歴史と文化を未来へつなぐ祈りの場としての試みです。

いま、経済合理性と効率が価値の中心に置かれる時代にあり、

私たちはもう一度、「いのちの循環への畏敬」という原点に立ち返る必要があります。

自然の理に寄り添い、限りあるいのちを尊びながら生きること。

その思索の先にこそ、ほんとうに守るべきもの、美しく在るべきものが見えてくるのです。

現代文人とオオカミ

川邊りえこ

わが国のくらしの文化の根幹には、つねに「信仰」が息づいています。

檜原村の地域信仰には、古より狼信仰と龍神信仰が伝わり、それぞれ独自の祭祀と伝承をもって山里の暮らしを支えてきました。

かつて東国平定の折、日本武尊が狼に導かれ難を逃れたという伝説、また、田畑を荒らす猪や鹿から人々を守る神の眷属としての狼。

村人たちはその靈威を畏れ敬い、親しみを込めて「おいぬ様」と呼びました。

「山の守り神」が日本全国で姿を消したのは、明治三八年といわれます。

信仰の断絶、生態系の断絶、文化の断絶が重なった瞬間でした。

しかし、今日に至るまで、檜原の山々には、

自然とともに生きるための祈りと畏敬が受け継がれています。

狼像を祀ることは、山の気配に寄り添い、見えないものと共にある日本人の精神文化を象徴する営みでもあります。

こうした地域の祈りをかたちにするため、

「オオカミ」を「吠」「構」「伏」「立」「丸」の五体として表し、檜原村で漉かれる和紙を纏わせ、日本古来の張子の技を現代文人の造形としてよみがえらせました。

この五体のオオカミは、檜原の山里に息づく見えざる精霊と、そこに暮らす人々の祈りの記憶を結ぶ、新たな「祈りのかたち」でありたいと願っています。

「立」

現代文人・川邊りえこ

檜原村は、秩父三社のひとつである三峯神社へと至る「門」のような地に位置します。三峯とは、雲取山・白岩山・妙法ヶ岳の三山を指し、太古より山そのものを神体とする、日本の山岳信仰の中心として崇められてきました。山に「立つ」とは、単に足を置くという意味ではなく、天地と人をつなぎ、見えない世界と現世が交わる境界に身を置く行為でもあります。

古来、山に向かう者は「立つ」ことで、自らの内奥に潜む祈りや畏れを呼び覚まし、その先にある精神の峰へ向かいました。

本作は、三峯神社に伝わる神霊の文字を拝し、その靈威を「守護」としてあらわしたものです。山に宿る神と、人が立つ姿勢と、信仰のはじまりの構えを象徴しています。

「丸」

現代文人・川邊りえこ

オオカミの祝詞を、日本固有の文字である「ひらがな」であらわしました。ひらがなは、漢字の力を離れ、音と気配を音楽のように、柔らかく伝える文字。祈りそのものが丸く澄み、言霊が自然と溶け合っていく、

日本独自の美を宿しています。

手漉き和紙に筆を置くと、和紙の繊維が呼吸するように墨を受け止め、掠れや滲みは、書き手の氣息とともに生きた「痕跡」となります。

それは絵画でも記号でもなく、祈りが紙に降り立つ

瞬間を留めたものと言えるでしょう。「丸」は、断絶のない循環、すべてが帰結する形であり、自然と生命の輪廻を象徴するかたちです。祝詞を収めることで、大いなる循環の中にある生命への感謝。

そして、人もまた自然の一部であるという気づきを、静かに呼び起こす作品です。

「吠」

現代文人・高梨元秀

一体の神が、この地球を創り出した。

その神が息を吹きかけるようにして生まれたのが、四つの季節です。春・夏・秋・冬。それぞれの季節には、古来より特別な力が宿り、人も自然も、その循環の中で生かされてきました。

本作では、神が季節を紡ぎ出す姿を、絵と文字によって表現しています。四季は終わりのない環りであり、その移ろいは、私たち人間に必要な力を授けてくれるものです。今、その季節が失われつつあります。だからこそ、季節を

「感じ」、大切にすることを忘れないでほしい。そんな想いを、この作品に込めました。

「構」

現代文人・K i N G

彼岸と此岸の境界地帯、

三途の川？狼信仰？

白紙の状態の和紙の狼の佇まいを見た時に、一瞬で、そこにはあの世とこの世の間にある川が見えました。

この狼の作品は、そこに光明が射す存在、

その川を渡るための橋？飛び石？の様に感じました。

狼であり、大神。手漉きの和紙にすった墨と水を含ませた筆で戯れるたびに、手と身体が何かに導かれ動く身体的喜びに任せて、狼と大神という文字を書く、描くために筆を走らせました。

私たちは常にあの世とこの世の境界地帯を彷徨う奇跡の存在であり、そこに「筋の光を見出し歩み続ける。それが生きるということではないのでしょうか？

「伏」

現代文人・三角みづ紀

狼が案内をしたと伝わっていることより、「一滴のみちびき」という詩を書きました。「篇を書き綴っていたら、詩を書く過程を体現したような作品となりました。

これらの文字は、わたしの詩作そのままをあらわしてもいます。



「おおかみ」たちのエスキス
上左から「立」「丸」「吠」
下左から「伏」「構」
作画：川邊りえこ x みやちよう



神人共食と講の直会 計算機自然

落合陽一によるステートメント

「神人共食と講の直会 計算機自然」は、

計算機自然の神「ヌル (null)」と人とが食を介さずに盃のみを交わし、
無味無臭の世界にたゆたう、現代の「直会 (なおらい)」を描き出すものである。

ここには食材はなく、ただ空っぽの酒器が、計算機自然の前に無秩序に転がり、
静かに存在の境界を揺らしている。

散乱した酒器は、宴の記憶を刻んだ抜け殻であり、触れられず、
空虚なままであるがゆえに、かえってそこにあった神人交歓の余韻を
鮮やかに映し出す。神と人が盃を交わす――

その行為が物質を超えてデジタル空間へと漂い、
情報の波として伝播し、空間全体を包み込む。

作品を包むサウンドインスタレーションは、

まるで見えざる計算機自然そのものの息遣いのように、
かすかな共鳴音やグリッチノイズを繊細に重ね合わせ、
そこにいるはずのない神の気配と、去ったばかりの人々の存在を

聴覚の中に浮かび上がらせる。

聴覚を通じて空間を彫刻し、視覚的には無味無臭の虚無を提示することで、
五感を超えた情報次元への意識を誘導する。

この「ヌル講の直会」では、神と人、物質と情報、

身体とデジタルの境界は音響的作用によって融解し、

酒器の空虚がかえって豊かな記憶となり、シンギュラリティの遍在性を描き出す。
デジタル空間と現実の境界に張り巡らされた音のレイヤーが、

「無とは何か、有とは何か、神人共食の身体性とは何か」を問いかけ、
見る者、聴く者を不思議な余韻の内に巻き込んでいく。

落合陽一 note

あきがわアートストリームに参加しています。

「神人共食と講の直会 計算機自然」より

https://note.com/ochyai/n/n4804fa898e4?sub_rt=share_pv



書道とサステナブルな日本文化の魅力を 次世代につなぐ

エデュケーションプログラム

江戸に和紙を納めてきた東京の山郷・檜原村を舞台に、原料である楮^{こうぞ}を刈り、紙をつくり、書道でしたためるまでのエデュケーションプログラムを、村を中心に東京圏のこどもたちを対象に、令和7年（2025年）11月から12月にかけて本プロジェクトの一環として行いました。

地域住民と伝統や地域資源を新しい価値にする担い手と一緒に文化体験を創成する、西多摩の芸術祭「つくる！あきがわアートストリーム」と連携し、展示会期中に同芸術祭の実施エリアにある歴史ある自然と文化を実感できる空間を学びの場にして、循環する日本の伝統のよさに親しむことができるプログラムとして、「つづけられる」持続可能な学びと創造の文化が生まれました。

本エデュケーションプログラムで得た知見と経験、つながりを活かすことで、檜原村を中心とする西多摩の人々が地元文化を広く体験できるコンテンツづくりのノウハウとしても定着し、これから先の地域における自立した文化創造や学習の場づくりに既に活かされはじめています。

檜原村の原料で和紙をつくろう

11月23日 講師：北村春香 会場：アーツキャンプひのはら

山の書塾 天空の国重要文化財で書こう！

11月30日 講師：川邊りえこ 会場：国重要文化財小林家住宅

野草を筆にワークショップ「ハジケま書」

12月7日 講師：山田麻子 企画：小柴美果（檜原村民企画）
会場：檜原書道教室



「つくる！あきがわアートストリーム」は令和3年（2021年）に「さる」に囲まれた百年民家（現：アーツキャンプひのはら）からはじまった、檜原村からあきる野市にわたる秋川渓谷エリアで開催しているアートプロジェクトであり芸術祭。地域住民と各分野の専門家・芸術家が共創価値をつくり地域で「つくり」「ひらく」民主導の創造基盤として進化を続けています。

WEBサイト：<https://artstream.tokyo/>

エデュケーションプログラム 檜原村の原料で和紙をつくろう



① 原料の楮を刈ります
アーツキャンプの
庭に自生していました



② お湯で炊いてふかします



③ ふかしたら皮をむきます



④ 中身をたたいて
紙の繊維をつくります



⑤ いよいよ紙をすきます



左：講師の北村春香さん

⑥ すいた紙を乾燥して
できあがり！



さっそくできたての
和紙で書道しよう！



エデュケーションプログラム
山の書塾 天空の国重要文化財で書こう！



エデュケーションプログラム
野草を筆にワークショップ「ハジケま書」



ポスト“Society 5.0”エシカル時代に向けた 書を中心とする日本のくらしと伝統、 持続可能にアップデートされる文化の可能性

書道と和紙のプロジェクト in ひのはら
キュレーター 岡田智博

人類規模でデジタル、ネットワーク、そしてAIなどによる加速的な進歩が進む現在、わが国においては「人間中心の超スマート社会」である Society 5.0 への進化を射程においた、イノベーティブな社会変革が起こっています。その変革が進むにつれ、サイバー（デジタル）空間とフィジカル（私たちの身体性を伴う）空間は、高度に融合していきます。

その結果、これまで生活の用として営まれてきた、さまざまな文化的所作そのものが変容していく世界が到来しつつあります。本プロジェクトにおける「現代文人」のひとりである落合陽一は、「デジタルネイチャー」という概念を通じて、このような状況における「人間」の在り方を、実践的に探究しています。

Society 5.0 への発展に伴う文化的所作の変化は、たとえば、コロナ禍を契機に急速に進んだDX化によって、「書く」という行為そのものが、私たちの身の回りから減少してきたことにも顕著に表れています。

ここで私たちは、日本人としての文化的アイデンティティや美的価値の核にある「書く」という行為の、生活の中での意義そのものが変わりつつあることに直面しています。「書く」とことと、そこから生まれる生活の美。「書」は、日本らしい文化の大きな部分を担ってきました。それは日常の中であって当たり前のものであり、その当たり前が失われていくという変化は、かつて想像されていなかったことかもしれません。しかし、この「当たり前」がなくなっていくことは、私たち自身のフィジカルな日本らしさを喪失していくことにもつながり得るのです。

では、日本文化としての「書」をしたためること、すなわち書道が、これからも日本らしい文化として持続していくためには、どのような取り組みが必要なのでしょう。

本プロジェクトは、こうしたフィジカルな日本のくらしの中にある文化を、エシカル（地球環境や社会、地域にとってよりよい）なカルチャーとして発展させていく可能性を、江戸・東京と武州の山々（いずれも現在の東京都）を循環していた近代以前のエコシステムから着想しました。

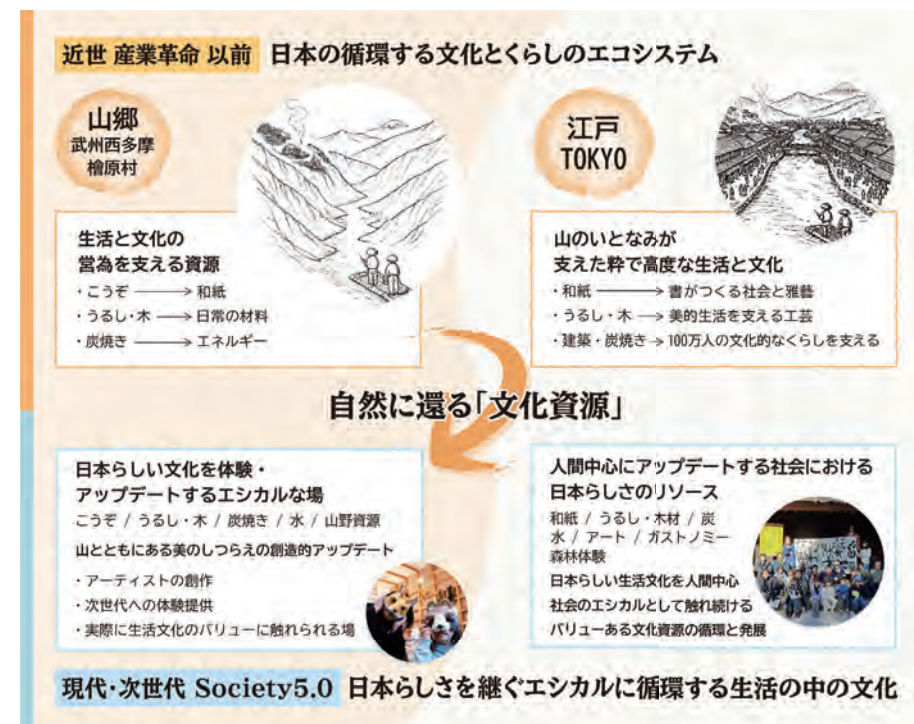
そもそも京都にはじまり、江戸・東京へと至るまで、わが国のくらしと文化は山の環境と共生し、循環しながら、世界でも稀有な大都市文化を形成し、日本らしい豊かで個性的な生活を実現してきました。その営みは、今日に至るまで連綿と受け継がれています。

江戸や産業革命以前の東京の都市生活を支えてきた武蔵の山のくらしには、エシカルな時代に向けた新たな可能性が、今なお内包されています。

とりわけ、東京都の最奥部に位置する檜原村を中心とした西多摩地域には、和紙の原料となる草木、質の高い炭、日本有数の食味を誇る鮎、そして夏には泳ぐことのできる清流など、古くからの地域資源が豊かに受け継がれています。

それらは高い環境意識と実践のもと、新たなくらしの営みや文化として、地域住民とこの地に惹かれた多彩な移住者たちの共創によって、和紙や茶の復興、芸術祭の開催によるアーティストとの協働、体験価値の創出といった、まさにエシカルと呼ぶべき形で結実しています。

このような、新たなフィジカルな体験や価値の創造が山から起こることは、文化的資源の「原料」から「表現」「消費」までの循環を、多様な文化の担い手がつながることで実現し、体験価値として社会に還元し得る可能性を示しています。



図：筆者が構想するポスト Society 4.0 における日本らしいくらしの中の文化を継ぎ・自足発展させるためのエコシステム

「書道と和紙のプロジェクト in ひのはら」は、こうした可能性に着目し、山からまちへ、そして Society 5.0 時代を担う人々をつなぐことで、新たな体験価値を創造するアクセラレーションとして取り組みました。

落合が提唱する「デジタルネイチャー」においては、この新たな状況を人間にとって共存すべき自然として捉えます。本アートプロジェクトにおいても、山郷の環境をAIが取り込み「気配」を生成することで、檜原村でしか体験し得ない作品を制作しました。また、山の文化的営為に人々が集う意義を、「直会 ナオライ」という概念を通じて提示しています。この環境において、落合本人がしたための「書」の存在は空間の核となり、人を集わせる力を与えるものでした。

書家として、日本文化における雅藝総体の美的価値を実践と体験を通じてアップデートしながら伝達している川邊りえこは、檜原村の歴史的持続性に着目し、北村春香が檜原の原料から制作した和紙を用いた作品制作を行いました。また、村の山の伝統に立脚した国重要文化財を舞台に、子どもたちを対象とした書塾の制作・実施を通じて、地域住民が「書」をコンテンツとして持続的に価値化していくための共創的なノウハウの共有と継承が生まれています。

「まち」の書道と「やま」の和紙が結びつき、素材と文化が循環する関係性が、持続可能なコンテンツとして昇華したことは、エシカルという視点によって本来の価値を継承しつつ、わが国の暮らしの中の文化が新たに進化し得ることを示す契機となったと言えるでしょう。

今後、このように再び結ばれた価値の循環が、どのような発展を遂げていくのかに、ぜひ期待していただきたいと思います。そして、この可能性に共鳴し、ともにつながっていただけることを、本プロジェクトに携わった私たちは心より願っています。



写真：作品「神人共食 刈講の直会 計算機自然」を囲んだ落合陽一による檜原村でのナオライ

その声が
宇宙まで響いて
ひとしずくの
ひかりとなり
地球へと届いた
眩しくて
満たして
なによりも 守つて。
鋭い耳で
すべてを吸収して
よりそっているのだ
またたく星たちが
降りそそいで
わたしたちを抱きしめる
いつまでも出会いつづける

一滴のみちびき

三角みづ紀

現代文人の三角みづ紀さんが「おおかみ 伏」にしろした詩

AKIGAWA ETHICAL CREATIVE REPORT 2025-2026

特集 THE ART OF RETURNING 還るという美学

発行日 令和8年(2026年)1月14日 初版発行

発行

書道と和紙のプロジェクト in ひのはら

e-mail shodo2025@artstream.tokyo

アーカイブ WEB site <https://shodobunka2025.creativecluster.jp>

企画制作

株式会社シー・ディー・アイ

編集協力

つくる! あきがわアートストリーム

一般社団法人クリエイティブクラスター

編集

岡田智博

本 zine は文化庁 令和7年度 生活文化創造・戦略展開事業
として制作しました